森鷗外集

杉浦非水裝幀

改造社版

昭和二年十二月二十五日印刷
昭和三年一月一日發行

現代日本文學全集　第三篇

著者　森林太郎

發行者　山本美
東京市麹町區内幸町一丁目三番地

印刷者　杉山愛二
東京市牛込區市谷加賀町一ノ二

發兌　改造社
東京市麹町區内幸町一丁目三番地
幸ビルディング壹階
振替口座　東京八四〇二番
電話　銀座一七三三番
銀座四五五八番
銀座五〇四六番

株式會社　秀英舍印刷

「森鷗外集」目次

巻頭寫眞（照影筆蹟）

小傳

即興詩人……三
うたかたの記……一八四
舞姫……一九五
文づかひ……二〇六
埋木……二一六
玉篋兩浦嶼……二五八
日蓮聖人辻説法……二六八
キタ・セクスアリス……二七三
金毛羅……三一六
生田川……三三八
あそび……三四四
蛇……三五二
妄想……三六〇
心中……三七〇
百物語……三七七
雁……三八六
高瀬舟……四三八
阿部一族……四四五
山椒大夫……四六四
紅木香以……四八〇
古い手帳から……四九七
長宗我部信親……五〇五
沙羅の木……五一二
我百首……五一八
（附）詩歌抄

年譜……五二一

森鷗外小傳

鷗外森林太郎、諱は高湛、源姓、鷗外漁史はその號、別に觀潮樓主人、千朶山房主人、歸休庵と號す。石見國津和野藩主亀井家の臣で、家代々醫を業とし、祖父の頃まで多く藩の典醫に任ぜられた。林太郎は文久二年正月生れ、幼時は國で漢學と蘭學とを受け、明治五年十一歳の時上京して獨逸語を修め、六年東京醫學校に入り、十四年卒業して醫學士となり、その冬陸軍に出仕し、十七年衞生學研究のため獨逸國留學を命ぜられ、ライプチヒ、ミュンヘン、伯林の大學に學び、二十一年九月歸朝した。その間專門醫學の外に、文學、哲學、美術、戯曲等に就ても深い研究を積み、歸朝後は軍醫學校及び陸軍大學校の教官として衞生學を講じ、兵士の食物と日本の家屋に關する實驗に從ひ、傍ら東京美術學校、慶應義塾に於て美術解剖學審美學を講じ、又小説『舞姫』『うたかたの記』『文づかひ』等を發表し、或は『衞生新誌』『醫事新論』等を創刊しては醫學上の意見を吐露し、「しがらみ草紙」を發刊しては文學評論及び歐洲文藝の飜譯紹介に力めた。二十四年醫學博士となり、日清戰役より臺灣の征討に從ひ、軍醫學校長、近衞師團軍醫部長を經て、豐前國小倉の第十二師團軍醫部長に轉じ、居ること四年第一師團軍醫部長に轉じて東京に歸つた。

日露戰役には第二軍軍醫部長として出征し、金州から奉天まで大小の戰鬪に參加し、凱旋後軍醫學校長事務取扱から、四十年遂に陸軍軍醫總監に進み、醫務局長に補せられた。小倉赴任以來久しく文壇と遠ざかつたが、これより以後創作に、飜譯に、評論に捲土重來の勢を以て活躍を開始し、次で文學博士の學位を受け、文藝委員會委員となり、又毎年、文部省美術展覽會審査委員を囑託せられ、大正三年以以後は專ら歴史、傳記の方面に筆を執り、無聞の人物を闡明するに努めた。五年醫務局長を辭して豫備に入り、翌年帝室博物館總長兼圖書頭に任ぜられ、帝國美術院長、臨時國語調査會長等を兼ね、十一年七月九日六十二歳で薨去するまで、我邦文化のため努力した。

『キタ・セクスアリス』は幼年より留學までの事を性然方面から書いたものであり、『舞姫』『うたかたの記』『文づかひ』等は留學中の記念作品といふべく、又『妄想』にもこの頃の事は現れて居る。小倉時代の事は『獨身』『鶏』『二人の友』などに書かれて居るが、本集には收められぬ。猶やゝ詳しい履歴と、本集所收小説の著作年代は、卷尾の年譜を參照せられたい。

林太郎が初て國から出た時は向島小梅町の父の家に同居し、十五年頃父に隨つて北千住に轉じ、獨逸から歸つた年に下谷中根岸に一戸を構へ、幾もなく下谷花園町東照宮裏坂下に徙つた。「しがらみ草紙」を出したのは此時代の事で、幸田露伴、井上通泰、賀古鶴所の諸氏が毎夜一時二時頃までも集會して痛飲淋漓文學藝術を論じた。それから二三年して本郷駒込千駄木町五十七番地、當時太田の原といふた處へ引越し、終に團子坂上の千駄木町二十一番地、所謂觀潮樓に移つたのであるが、面白い事はその五十七番地の跡に越して來られたのが漱石先生で、『吾輩は猫である』を書かれた家がそれである。團子坂の家は今紀文と稱せられた細木香以の取卷きの一人小倉是阿彌の舊宅で、それを崩した跡に觀潮樓を建築したのである。日露戰役凱旋後、千葉縣夷隅郡日在に別莊を作り、和漢の詩文集、新刊寄贈の小説類を置いて、時々休息の所として居つた。『妄想』の初めに書かれてゐるのは其處の事であり、八十八といふのも實在の別莊番である。

昭和二年十二月　　森　潤三郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

即興詩人

初版例言

一、即興詩人は璉馬の人 HANS CHRISTIAN ANDERSEN（1805—1875）の作にして、原本の初板は千八百三十四年に世に公にせられぬ。

二、此譯は明治二十五年九月十日稿を起し、三十四年一月十五日完成す。殆ど九星霜を經たり。然れども軍職の身に在るを以て、稿を屬するは、大抵夜間、若くは大祭日日曜日にして家に在り客に接せざる際に於てす。予は既に、歳月の久しき、嗜好の屢〻變じ、文致の畫一なり難きを憾み、又筆を擱くことの頻にして、興に乘じて揮瀉すること能はざるを惜みたりき。世或は予其職を曠しくして、縱に述作に耽ると謂ふ。寃も亦甚しきかな。

三、文中加特力教の語多し。印刷成れる後、我國公教會の定譯あるを知りぬ。而れども遂に改刪すること能はず。

四、此書は印するに四號活字を以てせり。予の母の、年老い目力衰へて、毎に予の著作を讀むことを嗜めるは、此書に字形の大なるを選みし所以の一なり。夫れ字形は大なり。然れども紙面殆ど餘白を留めず、段落猶且連續して書し、以て紙數をして太だ加はらざらしむることを得たり。

明治三十五年七月七日下志津陣營に於いて

譯者識す

第十三版題言

是れ予が壯時の筆に成れる IMPROVISATORE の譯本なり。國語と漢文とを調和し、雅言と俚辭とを融合せむと欲せし、放膽にして無謀なる嘗試は、今新に其得失を論ずることを須ゐざるべし。初めこれを縮刷に付するに臨み、予は大いに字句を削正せむことを期せしに、會〻歐洲大戰の起るありて、我國も亦其旋渦中に投ずるに至りぬ。羽檄旁午の間、予は僅に假刷紙を一閲することを得しのみ。

大正三年八月三十一日觀潮樓に於いて

譯者又識す

わが最初の境界

羅馬に往きしことある人はピアッツァ、バルベリイニを知りたるべし。こは貝殼持てるトリイトンの神の像に造り做したる、美しき噴井ある、大なる廣こうぢの名なり。貝殼よりは水湧き出でゝその高さ數尺に及べり。羅馬に往きしことなき人もかの廣こうぢのさまをば銅板畫にて見つることあらむ。かゝる畫にはキア、フェリチェの角なる家の見えぬこそ恨なれ。わがいふ家の石垣よりのぞきたる三條の樋の口は水を吐きて石盤に入らしむ。この家はわがためには尋常ならぬおもしろ味あり。そをいかにといふにわれはこの家にて生れぬ。首を回してわが稚かりける程の事をおもへば、目もくるめくばかりいろ〳〵なる記念の多きことよ。我はいづこより語り始めむかと心迷ひて爲むすべを知ら

ず。又我世の傳奇の全局を見わたせば、われはいよ〳〵これを寫す手段に苦めり。いかなる事をか緊要ならずとして棄て置くべき。いかなる事をか全書圖をおもひ浮べしめむために殊更に數へ舉ぐべき。わがためには面白きことも外人のためには何の興もなきものあらむ。われは我世のおほいなる稚物語をありのまゝに僞り飾ることなくして語らむとす。されどわれは人の意を迎へて自ら喜ぶ性のこゝにもまぎれ入らむことを恐る。この性は早くもわが稚き時に、畠の中なる雜草の如く萌え出でゝ、やうやく聖經に見えたる芥子の如く高く空に向ひて長じ、つひには一株の大木となりて、そが枝の間にわが七情は巣食ひたり。わが最初の記念の一つは既にその芽生を見せたり。おもふにわれは最早六つになりし時の事ならむ。われはおのれより稚き子供二三人と向ひなる尖帽僧の寺の前にて遊びき。寺の扉には小き眞鍮の十字架を打ち付けたりき。その處はおほよそ扉の中程にてわれは僞に手をさし伸べてこれに達することを得き。母上は我を伴ひてかの扉の前を過ぐるごとに、必ずわれを擡き抱きてかの十字架に接吻せしめ給ひき。あるときわれ又子供と遊びたりしに、甚だ稚き一人がいふやう。いかなればこれに來て、われ等と共に遊ばざるといひき。われさかしく答ふるやう。むべなり、耶蘇の稚子は十字架にかゝりたればといひき。さてわれ等は十字架の下にゆきぬ。かしこには何物も見えざりしかど、われ等は猶母に教へられし如く耶蘇に接吻せむとおもひき。さるを我等が口はかしこに屆くべきならねば、我等はかはる〴〵抱き上げて接吻せしめき。一人の子のさし上げられて僅に脣を尖らせたるを、抱いたる子力足らねば落しつ。この時母上通りかゝり給へり。この遊のさまを見て立ち住まり、指組みあはせて宣ふやう。汝等はまことの天使なり。さて汝はといひさして、母上はわれに接吻し給ひ、汝はわが天使なりといひ給ひき。

母上は隣家の女子の前にて、わがいかに罪なき子なるかを繰り返して語り給ひぬ。われはこれを聞きしが、この物語はいたくわが心に協ひたり。わが罪なきことは固よりこれがために前には及ばずなりぬ。人の意を迎へて自ら喜ぶ性の種は、この時始めて日光を吸ひ込みたりしなり。造化は我におとなしく軟なる心を授けたりき。さるを母上はつねに我がこゝろのおとなしきを我に告げ、わがまことに持てる長處と母上のわが持てりと思ひ給へる長處とを我にさし示して、小兒の罪なさはかの醜き「バジリスコ」の獸におなじきをおもひ給はざりき。かれもこれもおのが姿を見るときは死なでかなはぬ者なるを。

彼尖帽宗の寺の僧にフラア、マルチノといへるあり。こは母上の懺悔を聞く人なりき。かの僧に母上はわがおとなしさを告げ給ひき。祈のこゝろをばわれ知らざりしかど、祈の詞をばわれ善く諳じて洩らすことなかりき。僧は我をかはゆきものにおもひて、あるとき我に一枚の圖をおくりしことあり。圖の中なる聖母のこぼし給ふおほいなる涙の露は地獄の燄の上におちかかれり。亡者は爭ひてかの露の滴りおつるを承けむとせり。僧は又一たびわれを伴ひてその僧舍にかへりぬ。當時わが目にとまりしは、方なる形に作りたる圓柱の廊なりき。廊に圍まれたるは小き馬鈴薯庫にて、そこにはいとすぎ（チプレッソオ）の木二株、橘檬の木一株立てりき。開け放ちたる廊には世を逝りし僧どもの像をならべ懸けたり。部屋といふ部屋の戸には獻身者の傳記より撰び出したる畫圖を貼り付けたり。當時わがこの圖を觀し心は、後になりてラファエロ、アンドレア、デル、サルトオが作を

觀る心におなじかりき。

僧はそちは心猛き童なり、いで死人を見せむといひて、小き戸を開きつ。こゝは廊より二三級低きところなりき。われは延かれて級を降りて見しに、こゝも小き廊にて、四圍悉く闊髏なりき。闊髏は闊髏と接して壁を成し、壁はその竝びざまにて許多の小龕に分れたり。おほいなる龕には頭のみならで、胴をも手足をも具へたる骨あり。こは高位の僧のみまかりたるなり。かゝる骨には褐色の尖帽を被せて、腹に繩を結び、手には一卷の經文若くは枯れたる花束を持たせたり。贅卓、花形の燭臺、そのほかの飾をば肩胛、脊椎などにて細工したり。人骨の浮彫あり。これのみならず忌まはしくも、又趣なきはこゝの拵へざまの全體なるべし。僧は祈の詞を唱へつゝ行くに、われはひたと寄り添ひて從へり。僧は唱へ畢りていふやう。われも早晩こゝに眠らむ。その時汝はわれを見舞ふべきかといふ。われは一語をも出すこと能はずして、僧と僧のめぐりなる氣味わるきものとを驚き聆たり。まことに我が如き穉子をかゝるところに伴ひ入りしは、いとおろかなる業なりき。われはかしこにて見しものに心を動かさること甚しかりければ、歸りて僧の小房に入りしとき纔に生き返りたるやうなりき。この小房の窓には黃金色なる柑子のいと美しきありて、殆ど一間の中に垂れむとす。又聖母の畫あり。その姿は天使に擔ひ上げられて日光明なるところに浮び出でたり。下には聖母の息ひたまひし墓穴ありて、もゝいろちいろの花これを掩ひたり。われはかの柑子を見、この畫を見るに及びて、わづかに我にかへりしなり。

この始めて僧房をたづねし時の事は、久しき間わが空想に好き材料を與へき。今もかの時の事をおもへば、めづらしくあざやかに目の前に浮び出でむとす。わが當時の心にては、僧といふ者は全く我等の知りたる常の人とは殊なるやうなりき。かの僧が褐色の衣を着たる死人の殆どおのれとおなじさまなると共に棲めること、かの僧があまたの尊き人の上を語り、あまたの不思議の蹟を話すこと、かの僧の尊さをば我母のいたく敬ひ給ふことなどを思ひ合する程に、われも人と生れたる甲斐にかゝる人にならばやと折々おもふことありき。

母上は未亡人なりき。活計を立つるには、鍼仕事して得給ふ錢と、むかし我等が住みたりしおほいなる部屋を人に借して得給ふ價とあるのみなりき。われ等は屋根裏の小部屋に住めり。かのおほいなる部屋に引き移りたるはフエデリゴといふ年少き畫工なりき。フエデリゴは心敏く世をおもしろく暮らす少年なりき。かれはいともいとも遠きところより來ぬといふ。母上の物語り給ふを聞けば、かれが故郷にては聖母をも耶蘇の穉子をも知らずとぞ、その國の名をば蓮馬といへり。當時われは世の中にいろ〳〵の國語ありといふことを解せねば、畫工が我が言ふことを曉らぬを耳とほきがためならむとおもひ、おなじ詞を繰り返して聲の限り高くいふに、かれはわれを可笑しきものにおもひて、をりをり果をわれに取らせ、又わがために兵卒、馬、家などの形を忘がきあたへしことあり。われと畫工とは幾時も立たぬに中善くなりぬ。われは畫工を愛しき。母上もをり〳〵かれは善き人なりと宣ひき。さるほどにわれはとある夕母上とフラア、マルチノとの話を聞きしが、これを聞きてよりわがかの技藝家の少年の上をおもふ心あやしく動かされぬ。かの異國人は地獄に墜ちて永く浮ぶ瀨あらざるべきかと母上問ひ給ひぬ。そはひとりかの男の上のみにはあらじ。異國人のうちにはかの男の如く惡しき事をば一たびもせざるもの多し。かの輩は貧き人に逢ふときは物取らせて咎むことなし。かの輩は債ある

ときは期を愆たず額をたがへずして拂ふなり。然のみならず、かの輩は吾邦人のうちなる多人數の作る如き罪をば作らざるやうにおもはる。母上の問はおほよそ此の如くなりき。

フラア、マルチノの答へけるやう。さなり。まことにいはるゝ如き事あり。かの輩のうちには善き人少からず。されどおん身は何故に然るかを知り給ふか。見給へ。世中をめぐりありく惡魔は、邪宗の人の所詮おのが手に落つべきを知りたるゆゑ、强ひてこれを誘はむとすることなし。このゆゑに彼輩は何の苦もなく善行をなし、罪惡をのがる。善き加特力教徒はこれと殊にて神の愛子なり、これを陷れむには惡魔はさま〳〵の手立を用ゐざること能はず。惡魔はわれ等を誘ふなり。われ等は弱きものなればその手の中に落つること多し。されど邪宗の人は肉體にも惡魔にも誘はるゝことなしと答へき。

母上はこれを聞きて復た言ふべきこともあらねば、便なき少年の上をおもひて大息つき給ひぬ。かたへ聞せしわれは泣き出しつ。こはかの人の永く地獄にありて餓に苦められむつらさをおもひければなり。かの人は善き人なるに、わがために美しき畫をかく人なるに。

わが稺きころ、わがためにおほいなる意味ありと覺えし第三の人はペッポのをぢなりき。惡人ペッポといふも西班牙磴の王といふも皆その人の綽號なりき。此王は日ごとに西班牙磴の上に出御ましましき。（西班牙廣こうぢよりモンテ、ピンチョオの上なる街に登るには高く廣き石級あり。この石級は羅馬の乞兒の集まるところなり。西班牙廣こうぢより登るところなればかく名づけられしなり。）ペッポのをぢは生れつき兩の足痿えたる人なり。當時そを十字に組みて折り敷き居たり。されど稺きときよりの熟練にて、をぢは兩手もて歩くことい巧なり。其手には革紐を結びて、これに板を掛けたるが、をぢがこの道具にて歩む速さは健かなる脚もて行く人に劣らず。をぢは日ごとに上にもいへるが如く西班牙磴の上に坐したり。さりとて外の乞兒の如く憐を乞ふにもあらず。唯〻おのが前を過ぐる人あるごとに、詐ありげに面をしかめて「ボン、ジョオルノオ」（我俗の今日はといふ如し）と呼べり。日は既に入りたる後もその呼ぶ詞はかはらざりき。母上はこのをぢを敬ひ給ふことさまでならざりき。あらず。親族にかゝる人あるをば心のうちには恥ぢ給へり。されど母上はしば〳〵我に向ひて、そなたのためなれば、彼につきあひおくとのたまひき。餘所の人の此世にありて求むるものをば、かの人筐の底に藏めて持ちたり。若し臨終に、寺に納めだにせずば、そを讓り受くべき人、わが外にはあらぬを、母上は恃みたまひき。をぢも我に親むやうなるところありしが、我は其側にあるごとに、まことに喜ばしくおもふこと絶てなかりき。或る時、我はをぢの振舞を見て、心に怖を懷きはじめき。こは、をぢの本性をも見るに足りぬべき事なりき。例の石級の下に老いたる盲の乞兒ありて、往きかふ人の「バョッコ」（我二錢許に當る銅貨）一つ投げ入れむを願ひて、薄葉鐵の小筒をさら〳〵と鳴らし居たり。我がをぢは、面にやさしげなる色を見せて、帽を揮り動しなどすれど、人々その前をばいたづらに過ぎゆきて、かの盲人の何の會釋もせざるに、錢を與へき。三人かく過ぐるまでは、をぢ傍より見居たりしが、四人めの客かの盲人に小貨幣二つ三つ與へしとき、をぢは毒蛇の身をひねりて行く如く、石級を下りて、盲の乞兒の面を打ちもに、盲の乞兒は錢をも杖をも取りおとしつ。ペッポの叫びけるやう。うぬは盜人なり。我錢を竊む奴なり。立派に癈人といはるべき身にもあらで、たゞ日の見えぬを手柄顔に、

わが口に入らむとする「パン」を奪ふこそ心得られねといひき。われはこゝまでは聞きつれど、こゝまでは見てありつれど、この時買ひに出でたる、一「フォリエッタ」（一勺）の酒をひさげて、急きて家にかへりぬ。

大祭日には、母につきてをぢがり祝にゆきぬ。その折には苞苴もてゆくことなるが、そはをぢが嗜めるおほ房の葡萄二つ三つか、さらずば砂糖につけたる林檎なんどなりき。われはをぢ御と呼びかけて、その手に接吻しき。をぢはあやしげに笑ひて、われに半「バヨッコ」を與へ、果子をなぶりひそ、果子は食ひ畢りたるとき、迹かたもなくなるものなれど、この錢はいつまでも貯へらるゝものぞと教へき。

をぢが住めるところは、暗くして見苦しかりき。一間には窓といふものなく、また一間には壁の上の端に、破硝子を紙もて補ひたる小窓ありき。飯所の用をもなしたる大箱と、衣を藏むる小桶二つとの外には、家具といふものなし。をぢがり往け、といはるゝときは、われ必ず泣きぬ。これも無理ならず。母上はをぢにやさしくせよ、と我にをしへながら、我を嚇さむとおもふときは、必ずをぢを案山子に使ひ給ひき。母上の宣たまひけるやう。かく惡劇せば、好きをぢ御の許にやるべし。さらば汝も燈の上に坐して、をぢと共に補乞するならむ、歌をうたひて「バヨッコ」をめぐまるゝを待つならむとのたまふ、われはこの詞を聞きても、あながち恐るゝことなかりき。母上は我をいつくしみ給ふこと、目の球にも優れるを知りたれば。

向ひの家の壁には、小龕をしつらひて、それに聖母の像を据ゑ、その前にはいつも燈を燃やしたり。「アエ、マリア」の鐘鳴るころ、われは近隣の子供と像の前に跪きて歌ひき。燈の光ゆらめくときは、聖母も、いろ〳〵の紐、珠、銀色したる心の臟などにて飾りたる耶蘇のをさな子も、共に動きて、我等が面を見て笑み給ふ如くなりき。われは高く朗なる聲して歌ひしに、人々聞きて善き聲なりといひき。或る時英吉利人の一家族、我歌を聞きて立ちとまり、歌ひ畢るを待ちて、長らしき人われに銀貨一つ與へき。母に語りしに、そなたが聲のめでたさ故、とのたまひき。されどこの詞はその後我祈を妨ぐることいかばかりなりしを知らず。それよりは、聖母の前にて歌ふごとに、聖母の上をのみ思ふこと能はずして、必ず我聲の美しきを聞く人やあると思ひ、かく思ひつゝも、聖母のわがあだし心を懷けるを嫉み給はむかと

あやぶみ、聖母に向ひて罪を謝し、あはれなる子に惡悲の眸を垂れ給へと願ひき。

わが餘所の子供に出で逢ふは、この夕の祈の時のみなりき。わが世は靜けかりき。わが自ら作りたる夢の世に心を潛め、仰ぎ臥して開きたる窓に向ひ、伊太利の美しき青空を眺め、日の西に傾くとき、紫の光ある雲の黄金色したる地の上に垂れかゝりたるをめで、時の遷るを知らざることしば〳〵なりき。ある時は、遠くクキリナアル（丘の名にて、其上に法皇の宮居あり）と家々の棟とを越えて、紅に染まりたる地平線のわたりに、眞黑に浮き出でゝ見ゆる「ピニョロ」の木々の方へ、飛び行かばや、と願ひき。我部屋には、この眺ある窓の外、中庭に向へる窓ありき。我家の中庭は、隣の家の中庭に竝びて、いづれもいと狹く、上の方は木の「アルタナ」（物見のやうにしたる屋根）にて鎖されたり。庭ごとに石にて甃みたる井ありしが、家々の壁と井との間をば、人ひとり僅かに通らるゝほどなれば、我は上より覗きて、二つの井の内を見るのみなりき、綠なるほうらいしだ（アヂアンツム）生ひ茂りて、深きところは唯〻黑くのみぞ見えたる。俯してこれを見るたびに、われは地の底を見おろすやうに覺えて、こゝにも怪しき境あ

りとおもひき。かゝるとき、母上は杖の尖にて窓硝子を淨め、なんぢ井に墜ちて溺れだにせずば、この窓に當りたる木々の枝には、汝が食ふべき果おほく熟すべしとのたまひき。

隧道、ちご

我家に宿りたる畫工は、廓外に出づるをり、我を伴ひゆくことありき。畫を作る間は、われかれを妨ぐることなかりき。さて作り畢りたるとき、われ稗き物語して慰むるに、かれも今はわが國の詞を解して、面白がりたり。われは既に一たび畫工に隨ひて、「クリア、ホスチリア」にゆき、昔游戯の日まで猛獸を押し込めおきて、つねに無辜の俘囚を獅子、「イエナ」獸なんどの餌としたりと聞く、かの暗き洞の深き處まで入りしことあり。洞の裡なる暗き道に、我等を導きてくゞり入り、燃ゆる松火を、絶えず石壁に振り當てたる僧、深き池の水の、鏡の如く明にて、目の前には何もなきやうなれば、その足もとまで湛へ寄せたるを知らむには、松火もて觸れ探らでは、かなけざるほどなる、いづれもわが空想を激したりき。われは怖をば懷かざりき。そは危しといふことを知らねばなりけり。

街のはつる處に、「コリゼエオ」(大觀柳)の頂見えたるとき、われ等はかの洞の方へゆくにや、と畫工に問ひしに、否、あれよりは迥に大なる洞にゆきて、面白きものを見せ、そなたをも景色と俱に寫すべし、と答へき。葡萄圃の間を過ぎ、古の混堂の址を圍みたる白き石垣に沿ひて、ひたすら進みゆく程に羅馬の府の外に出でぬ。日はいと烈しかりき。綠の枝を手折りて、車の上に插し、農夫はその下に眠りたるに、馬は車の片側に吊り下げたる一束の秣を食ひつゝ、ひとり徐に歩みゆけり。やう〳〵女神エジェリアの洞にたどり着きて、われ等は朝餐を食べ、岩間より湧き出づる泉の水に、葡萄酒混ぜて飲みき。洞の裏には、天井にも四方の壁にも、すべて絹、天鵝絨なんどにて張りたらむやうに、綠こまやかなる苔生ひたり。露けく茂りたる蔦の、おほいなる洞門にかゝりたるさまはカラブリア州の谿間なる葡萄架を見る心地す。洞の前數歩には、その頃いと寂しき一軒の家ありて、「カタコンバ」のうちの一つに造りかけたりき。この家今は潰えて斷礎をのみぞ留めたる。「カタコンバ」は人も知りたる如く、羅馬城とこれに接したる村々とを通ずる隧道なりしが、半はおのづから壞れ、半は盜人、ぬけうりする人なんどの隱家となるを厭ひて、石もて塞がれたるなり。當時猶存じたるは聖セバスチアノ寺の内なる穹窿の墓穴よりの入口と、わが言へる一軒家よりの入口とのみなりき。さてわれ等はかの一軒家のうちなる入口より進み入りしが、おもふに最後に此道を通りたるはわれ等二人なりしなるべし、いかにといふに此入口はわれ等が危き目に逢ひたる後、いまだ幾もあらぬに塞がれて、後には寺の内なる入口のみ殘りぬ。かしこには今も僧一人居りて、旅人を導きて穴に入らしむ。

深きところには、軟なる土に掘りこみたる道の行き違ひたるあり。その枝の多き、その樣の相似たる、おもなる筋を知りたる人も踏み迷ふべきほどなり。われは稗心に何ともおもはず。畫工はまた豫め其心して、我を伴ひ入りぬ。先づ蠟燭一つ點し一つをば猶衣のかくしの中に貯へおき、一卷の絲の端を入口に結びつけ、さて我手を引きて進み入りぬ。忽ち天井低くなりて、われのみ立ちて歩まるゝところあり、忽ち又岐路の出づるところ廣がりて方形をなし、見上ぐるばかりなる穹窿をなしたるあり。われ等は中央に小き石卓を据ゑたる圓堂を過りぬ。こゝは始て某督教に歸依したる人々の、異教の民に逐はるゝごとに、ひそかに集りて神に仕へまつりしところなりとぞ。フェデリゴはこゝに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

て、この壁中に葬られたる法皇十四人、その外數千の獻身者の事を物語りぬ、われ等は石龕のわれ目に燭火さしつけて、中なる白骨を見き。（この墓には何の飾もなし。拿破里に近き聖ヤヌアリウスの「カタコンバ」には聖像をも文字をも彫りつけたるあれど、これも技術上の價あるにあらず。基督教徒の墓には、魚を彫りたり。希臘文の魚といふ字は「イヒトユス」なれば、暗に「イエソウス、クリストス、テオウ、ウイオス、ソオテエル」の文の首字を集めて語をなしたるなり。此希臘文はこゝに耶蘇基督神子救世者と云ふ。）われ等はこれより入ること二三歩にして立ち留りぬ。ほぐし來たる絲はこゝにて盡きたればなり。畫工は絲の端を拵鉦の孔に結びて、蠟燭を拾ひ集めたる小石の間に立て、さてそこに蹲りて、隧道の模樣を寫し始めき。われは傍なる石に躓けて合掌し、上の方を仰ぎ視ゐたり。燭は半ば流れたり。されどさきに貯へおきたる新なる蠟燭をば、今取り出してその側におきたる上、火打道具さへ帶びたれば、消えなむ折に火を點すべき用意ありしなり。

われはおそろしき暗黑天地に通ずる幾條の道を望みて、心の中にさま〳〵の奇怪なる事をおもひ居たり。この時われ等が周圍には寂として何の聲も聞えず、唯ゝ忽ち斷え忽ち續く、物寂しき岩間の雫の音を聞くのみなりき。われはかく由なき妄想を懷きてしばしあたりを忘れ居たるに、ふと心づきて畫工の方を見やれば、あな訝かし、畫工は大息つきて一つところを馳せめぐりたり。その間かれは頻に俯して、地上のものを搜し索むる如し。かれは又火を新なる蠟燭に點じて再びあたりをたづねたり。その氣色たゞならず覺えければ、われも立ちあがりて泣き出しつ。

この時畫工は聲を勵まして、こは何ごとぞ、善き子なれば、そこに坐りゐよ、と云ひしが、又肩を攀めて地を見たり。われは畫工の手に取りすがりて。最早登りゆくべし、こゝには居りたくなし、とむつかりたり。畫工は、そちは善き子なり、畫かきてや遣らむ、果子をや與へむ、こゝに錢もあり、といひつゝ、衣のかくしを探して、財布を取り出し、中なる錢をば、ことごとく我に與へき。我はこれを受くるとき、畫工の手の氷の如く冷になりて、いたく震ひたるに心づきぬ。我はいよ〳〵騷ぎ出し、母を呼びてます〳〵泣きぬ。畫工はこの時我肩を掴みて、劇しくゆすり搖かし、靜にせずば打擲せむ、といひしが、急に手巾を引き出して、我腕を縛りて、しかと其端を取り、さて俯してあまたび我に接吻し、かはゆき子なり、そちも聖母に願へ、といひき。絲をや失ひ給ひし、と我は叫びぬ。今こそ見出さめ、といひ〳〵、畫工は又地上をかいさぐりぬ。

さる程に、地上なりし蠟燭は流れ畢りぬ。手に持ちたる蠟燭も、かなたこなたを搜し索むる忙しさに、流るゝといよ〳〵早く。今は手の際まで燃え來りぬ。畫工の周章は大方ならざりき。そも無理ならず。若し絲なくして歩を運ばば、われ等は次第に深きところに入りて、遂に活路なきに至らむも計られざればなり。畫工は再び氣を勵まして探りしが、こたびも絲を得ざりしかば、力拔けて地上に坐し、我頭を抱きて大息つき、あはれなる子よ、とつぶやきぬ。われはこの詞を聞きて、最早家に還られざることぞ、とおもひければ、いたく泣きぬ。畫工にあまりに緊しく抱き寄せられて、我が縛られたる手はゐざり落ちて地に達したり。我は覺えず埃の間に指さし入れしに、例の絲を撮み得たり。ここにこそ、と我呼びしに、畫工は我手を攀りて、物狂ほしきまでよろこびぬ。あはれ、われ等二人の命はこの絲にぞ繫留められける。

われ等の再び外に歩み出でたるときは、日の

暖に照りたる、天の蒼く晴れたる、木々の梢のうるはしく綠なる、皆常にも增してよろこばしかりき。フェデリゴは又其に接吻して、衣のかくしより美しき銀の綫を取り出し、これをば汝に取らせむ、といひて與へき。われはあまりの嬉しさに、けふの恐ろしかりし事共、はや悉く忘れ果てたり。されど此事を得忘れ給はざるは、始終の事を聞き給ひし母上なりき。フェデリゴはこれより後、我を伴ひて出づることを許されざりき。フラア、マルチノもいふやう。かの時二人の命の助かりしは、全く聖母のおほん惠にて、邪宗のフェデリゴが手には授け給はざる絲を、善く神に仕ふる、やさしき子の手には與へ給ひしなり。されば聖母の恩をば、身を終ふるまで、ゆめ忘るゝこと勿れといひき。

フラア、マルチノがこの詞と、或る知人の戲に、アントニオはあやしき子なるかな、うみの母をば愛するやうなれど、外の女をばことごとく嫌ふと見ゆれば、あれをば、人となりて後僧にこそすべきなれ、といひしことあるとによりて、母上はわれに出家せしめむとおもひ給ひき。まことに我は奈何なる故とも知らねど、女といふ女は側に來らるゝだに厭はしう覺えき。母上のところに來る婦人は、入の妻ともいはず、處女ともいはず、我が稚き詞にて、このあやしき好憎の心を語るを聞きて、いとおもしろき事におもひ做し、強ひて我に接吻せむとしたり。就中マリウチアといふ娘は、この戲にて我を泣かすること屢なりき。マリウチアは活潑なる少女なりき。農家の子なれど、裁縫店にて雛形娘をつとむるゆゑ、華麗やかなる色の衣をよそひて、幅廣き白き麻布もて髪を卷けり。この少女フェデリゴが畫の雛形をもつとめ、又母上のところにも遊びに來て、その度ごとに自らわがいひなづけの妻なりといひ、我を小き夫なりといひて、迫りて接吻せむとしたり。われ諾はねば、この少女しば〳〵武を用ゐき。或る日われまた脅されて泣き出しゝに、さても猶稚兒なりけり、乳房啣ませずては、啼き止むまじ、とて我を搔き抱かむとす。われ慌てゝ逃ぐるを、少女はすかさず追ひすがりて、兩膝にて我身をしかと挾み、いやがりて振り向かむとする頭を、やう〳〵胸の方へ引き寄せたり。われは少女が插したる銀の矢を拔きたるに、豐なる髮は波打ちて、我身をも、露れたる少女が肩をも掩はむとす。母上は室の隅に立ちて、笑みつゝマリウチアがなすわざを勸め勵まし給へり。この時フェデリゴは戶の片蔭にかくれて、纏に此群を忍がきぬ。われは母上にいふやう。われは生涯妻といふものをば持たざるべし。われはフラア、マルチノの君のやうなる僧とこそならめといひき。

夕ごとにわが怪しく何の詞もなく坐したるを、母上は出家せしむるにたよりよき性なりとおもひ給ひき。われはかゝる時、いつも人となりたる後、金あまた得たらむには、いかなる寺、いかなる城をか建つべき、寺の主、城の主となりなむ日には、「カルヂナアレ」の僧の如く、赤き衷甸に乘りて、金色に裝ひたる僕あまた隨へ、そこより出入せむとおもひき。或るときは又フラア、マルチノに聞きたる、種々なる獻身者の話によそへて、おのれ獻身者とならむをりの事をおもひ、世の人いかにおのれを責むとも、おのれは聖母のめぐみにて、つゆばかりも苦痛を覺えざるべしとおもひき。殊に願はしく覺えしは、フェデリゴが故郷にたづねゆきて、かしこなる邪宗の人々をまことの道に歸依せしむる事なりき。

母上のいかにフラア、マルチノと謀り給ひて、その日とはなりけむ。そはわれ知らでありしに、或る朝母上は、我に小き衣を着せ、其上に白衣を打掛け給ひぬ。此白衣は膝のあたりまで屆き

て、寺に仕ふる兒の着るものに同じかりき。母上はかく爲立てゝ、我を鏡に向はせ給ひき。我は此日より尖帽宗の寺にゆきてちごとなり、火伴の童達と共に、おほいなる吊香爐を提げて儀にあづかり、また贄卓の前に出でゝ讃美歌をうたひき。總ての指圖をばフラア、マルチノなしつ。われは幾程もあらぬに、小き寺のうちに住み馴れて、贄卓に畫きたる神の使の童の顏を悉く記え、柱の上なるうねりたる模樣を識り、瞑目したるときも、醜き龍と戰ひたる、美しき聖ミケルを面前に見ることを得るやうになり、鋪床に刻みたる髑髏の、綠なる蔦かづらにて編みたる環を戴けるを見てはさま〴〵の怪しき思をなしき。（聖ミケルが大なる翼ある美少年の姿にて、惡鬼の頭を踏みつけ、槍をその上に加へたるは、名高き畫なり。）

美小鬟、卽興詩人

萬聖祭には衆人と俱に骨龕にありき。とはフラア、マルチノの嘗て我を伴ひて入りにしところなり。僧どもは皆經を誦するに、我は火伴の童二人と共に、髑髏の贄卓の前に立ちて、提香爐を振り動したり。骨もて作りたる燭臺に、けふは火を點したり。僧侶の遺骨の手足全きは、けふ頷に新しき花の環を戴きて、手に露けき花の一束を取りたり。この祭にも、いつもの如く、人あまた集ひ來ぬ。歌ふ僧の「ミゼレエレ」（「ミゼレエレ、メイ、ドミネ、」主よ、我を憐み給へ、と唱へ出す加特力教の歌をいふ）唱へはじむるとき、人々は膝を屈めて拜したり。髑髏の色白みたる、髑髏と我との間に渦卷ける香の烟の怪しげなる形に見ゆるなどを、我は久しく打ち目守り居たりしに、こはいかに、我身の周圍の物、皆獨樂の如くに廻り出しつ。物を見るに、すべて大なる虹を隔てゝ望むが如し。耳には寺の鐘百ばかりも、一時に鳴るらむやうなる音聞ゆ。我心は早き流を舟にて下る如くにて、譬へむやうなく日出たかりき。これより後の事は知らず。我は氣を喪ひき。人あまた集ひて、鬱陶しくなりたるに、我空想の燃え上りたるや、この眩暈のもとなりけむ。醒めたるときは、寺の園なる樅樣の木の下にて、フラア、マルチノが膝に抱かれ居たり。

わが夢の裡に見ときといふ、首尾整はざる事を、フラア、マルチノを始として、僧ども皆神の業なりといひき。聖のみたまは面前を飛び過ぎ給ひしかど、はかなき童のそのひかり耀けるさまにえ堪へで、卒倒したるならむといひき。これより後、われは怪しき夢をみること頻なりき。そを母上に語れば、母上は又友なる女どもに傳へ給ひき。そが中には、われまことにさる夢を見しにはあらねど、見きと詐りて語りしもありき。これによりて、我を神のおん子なりとする、人々の惑は、日にけに深くなりまさりぬ。

さる程に嬉しき聖誕祭は近づきぬ。つねは山住ひする牧者の笛ふき（ピッフェラリ）となりたるが、短き外套着て、紐あまた下げ、尖りたる帽を戴き、聖母の像ある家ごとに音信れ來て、救世主の誕れ給ひしは今ぞ、と笛の音に知らせありきぬ。この單調にして悲しげなる聲を聞きて、我は朝な〳〵覺むるが常となりぬ。覺むれば說教の稽古す。おほよそ聖誕日と新年との間には、「サンタ、マリア、アラチェリ」の寺なる基督の像のみまへにて、童男童女の說教あること、年ごとの例なるが、我はことし其一人に當りたるなり。

吾齡は甫めて九つなるに、かしこにて說教せむこと、いとめでたき事なりとて、歡びあふは、母上、マリウチア、我の三人のみかは。わがありあふ卓の上に登りて、一たびさらへ聞かせたるを聞きし、畫工フェデリゴもこよなうめでたがりぬ。さて其日になりければ、寺のうちなる

卓の上に押しあげられぬ。我家のとは違ひて、この卓には毯を被ひたり。われはよその子供の如く、諳じたるまゝの説教をなしき。聖母の心より血汐出でたる、稚き甚督のめでたさなど、説教のたねなりき。我順番になりて、衆人に仰ぎ見られしとき、我胸跳りしは、恐ろしさゆゑにはあらで、喜ばしさのためなりき。これ迄の小兒の中にて、尤も人々の氣に入りしもの、即ち我なること疑ひなかりき。さるをわが後に、卓の上に立たせられたるは、小き女の子なるが、その言ふべからず優しき姿、驚くべきまでしをらしき顏つき、調淸き樂に似たる聲音に、人々これぞ神のみつかひなるべき、とさゝやきぬ。母上は、我子に優る子はあらじ、といはまほしう思ひ給ひけむが、これさへ靡高く、あの女の子の贅卓に畫ける神のみつかひに似たることよ、とのたまひき。母上は我に向ひて、かの女子の怪しく濃き目の色、鴉靑いろの髮、をさなくて又怜悧げなる顏、美しき紅葉のやうなる手などを、繰りかへして譽め給ふに、わが心には妬ましきやうなる情起りぬ。母上は我上をも神のみつかひに譬へ給ひしかども。

鶯の歌あり。まだ巢ごもり居て、薔薇の枝の綠の葉を啄めども、今生ぜむとする蕾をば見ざりき。二月三月の後、薔薇の花は開きぬ。今は鶯これにのみ鳴きて聞かせ、つひには刺の間に飛び入りて、血を流して死にき。われ人となりて後、しば〳〵此歌の事をおもひき。されど「アラチェリ」の寺にては、我耳も未だこれを聞かず、我心も未だこれを含ませざりき。

母上、マリウチア、その外女どもあまたの前にて、寺にてせし説教をくりかへすこと、しばしばありき。わが自ら喜ぶ心はこれにて慰められき。されど我が未だ語り厭かぬ間に、かれ等は早く聽き倦みき。われは聽衆を失ひはじの心より、自ら新しき説教一段を作りき、その詞は、まことの聖誕日の説教といはむよりは、寺の祭を敍したるものといふべき詞なりき。そを最初に聞きしはフェデリゴなるが、かれは打ち笑ひ乍らも、そちが説教は、兎も角もフラア、マルチノが教へしよりは善し、そちが身には詩人や舍れる、といひき。フラア、マルチノより善しといへる詞は、わがためにいと喜ばしく、さて詩人とはいかなるものならむとおもひ煩ひ、おそらくは我身の内に舍れる善き神のみつかひならむと判じ、又夢のうちに我に面白きものを見するものにやと疑ひぬ。

母上は家を離れて遠く出で給ふこと稀なりき。されば或日の晝すぎ、トラステエエル（テエエル河の右岸なる羅馬の市區）なる友だちを訪はむ、とのたまひしは、我がためには祭に往くごとくなりき。日曜に着る衣をきよそひぬ。中單の代にその頃着る習なりし絹の胸當をば、針にて上衣の下に縫ひ留めき。領巾をば幅廣き襞に揞みたり。頭には縫とりしたる帽を戴きつ。我姿はいとやさしかりき。

とぶらひ畢りて、家路に向ふころは、はや頗る遲くなりたれど、月影さやけく、空の色靑く、風いと心地好かりき。路に近き丘の上には「チプレッソオ」、「ピニョロ」なんどの常磐樹立てるが、怪しげなる輪廓を、鈍く空に畫きたり。人の世にあるや、とある夕、何事もあらざりしを、久しくえ忘れぬやうに、美しう思ふことあるものなるが、かの歸路の景色、また然る類なりき。國を去りての後も、テエエルの流のさまを思ふごとに、かの夕の景色のみぞ心には浮ぶなる。黃なる河水のいと濃げに見ゆるに、月の光はさしたり。碾穀車の鳴り響く水の上に、朽ち果てたる橋柱、黑き影を印して立てり。この景色心に浮べば、あの折の心輕げなる少女子さへ、扁鼓手に把りて、「サルタレルロ」舞ひつゝ過ぐらむ心地す。（「サルタレルロ」の事をば聊註す

べし。こは單調なる曲につれて踊り舞ふ羅馬の民の技藝なり。一人にて踊ることあり。又二人にても舞へど、その身の相觸るゝことはなし。大抵男子二人、若くは女子二人なるが、跳ぬる如き早足にて半圓に動き、その間手をも休むることなく、羅馬人に產れ付きたる、しなやかなる振をなせり。女子は裳裾を寒ぐ。鼓をば自ら打ち、又人にも打たす。其調の變化といふは、唯遲速のみなり。）サンタ、マリア、デルラ、ロツンダの街に來て見れば、こゝはまだいと賑はし。魚蠟の烟を風のまに〳〵吹き靡かせて、前に木机を据ゑ、そが上に月桂の青枝もて編みたる籠に貨物を載せたるを飾りたるは、肉嚙ぐ男、果賣る女などなり。剝栗並べたる釜の下よりは、火燄立昇りたり。賈人の物いひかはす聲の高きは、伊太利ことば知らぬ旅人聞かば、命をも顧みざる爭とやおもふらむ。魚賣る女の店の前にて、母上識る人に逢ひ給ひぬ。女子の間とて、物語長きに、店の蠟燭流れ盡きむとしたり。さて連れ立ちて、其人の家の戸口までおくり行くに、街の上はいふもさらなり、「コルソオ」の大道さへ物寂しう見えぬ。されど美しき水盤を築きたるピアツツァ、ヂ、トレヰイに曲り出でしときは、又賑はしきさま前の如し。

こゝに古き殿づくりあり。意なく投げ壘ねたらむやうに見ゆる、礎の間より、水流れ落ちて、月は恰も好し棟の上にぞ照りわたれる。河伯の像は、重き石衣を風に吹かせて、大なる瀧を見おろしたり。瀧のほとりには、喇叭吹くトリイトンの神二人海馬を馭したり。その下には、豐に水を湛へたる大水盤あり。盤を繞れる石級を見れば農夫どもあまた心地好げに月明の裡に臥したり。截り碎きたる西瓜より、紅の露滴りたるが其傍にあり。骨組太き童一人、身に着けたるものとては、薄き汗衫一枚、鞣革の袴一つなるが、その袴さへ、拴鈕脫れて膝のあたりに垂れかゝりたるを、心ともせずや、「キタルラ」の絃、おもしろげに搔き鳴して坐したり。忽にして歌ふこと一句、忽にして又奏づること一節。農夫どもは掌打ち鳴しつ。母上は立ちとまり給ひぬ。この時童の歌ひたる歌こそは、いたく我心を動かしつれ。あはれ此歌よ。こは尋常の歌にあらず。この童の歌ふは、目の前に見え、耳のほとりに聞ゆるが儘なりき。母上も我も亦曲中の人となりぬ。さるに其歌には韻脚あり、其調はいと妙なり。童の歌ひけるやう。青き空を衾として、白き石を枕としたる寢ごゝろの好さよ。かくて笛手二人の曲をこそ聞け。童は斯く歌ひて、「トリイトン」の石像を指したり。童の又歌ひけるやう。こゝに西瓜の血汐を酌める、百姓の一群は、皆戀人の上安かれと祈るなり。その戀人は今は寢て、聖ピエトロの寺の塔、その法皇の都にゆきし、人の上をも夢みるらむ。人々の戀人の上安かれと祈りて飲まむ。又世の中にあらむ限の、箭の手開かぬ少女が上をも、皆安かれと祈りて飲まむ。（箭の手開かぬ少女とは、髮に插す箭をいへるにて、處女の箭には握りたる手あり、嫁ぎたる女の箭には開きたる手あり。）かくて童は、母上の脇を揖りて、さて母御の上をも、又その童の鬚生ふるやうになりて、迎へむ少女の上をも、と歌ひぬ。母上善くぞ歌ひしと讃め給へば、農夫どももジャコモが旨さよ、と手打ち鳴してさゞめきぬ。この時ふと小き寺の石級の上を見しに、こゝには識る人ひとりあり。そは鉛筆取りて、この月明の中なる群を、寫さむとしたる畫工フェデリゴなりき。歸途には畫工と、母上と、かの歌うたひし童の上につきて、語り戲れき。その時畫工は、かの童を卽興詩人とぞいひける。

フェデリゴの我にいふやう。アントニオ聞け。そなたも卽興の詩を作れ。そなたは固より詩人なり。たゞ例の說教を韻語にして歌へ。こ

れを聞きて、我初めて詩人といふことあきらかにさとれり。まことに詩人とは、見るもの、聞くものにつけて、おもしろく歌ふ人にぞありける。げにこは面白き業なり。想ふにあながち難からむとは思はれず、「キタルラ」一つだにあらましかば。わが初の作の料になりしは、向ひなる枯肉鉢なりしこそ可笑しけれ。此家の貨物の排べ方は、旅人の目にさへ留まるやうなりければ、早くも我空想を襲ひしなり。月桂の枝美しく編みたる間には、おほいなる駝鳥の卵の如く、乾酪の塊懸りたり。「オルカノ」の笛の如く、金紙巻きたる燭は竝び立てり。柱のやうに立てたる腸づめの肉の上には、琥珀の如く光を放ちて、「パルミジャノ」の乾酪据わりたり。夕になれば、燭に火を點ずるほどに、其光は腸づめの肉と「プレシチウットオ」(らかん)との間に燃ゆる、聖母像前の紅玻璃燈と共に、この幻の境を照せり。我詩には、店の卓の上なる猫兒、店の女房と僧を爭ひたる、若き「カップチノ」僧さへ、殘ることなく入りぬ。此詩をば、幾度か、心の内にて吟じ試みて、さてフェデリゴに歌ひて聞かせしに、フェデリゴめでたがりければ、つひに家の中に廣まり、又街を蹈えて、向ひなるひものやの女房の耳にも入りぬ。女房聞きて、げに珍らしき詩なるかな、ダンテの神曲とはかゝるものか、とぞ稱へける。

これを手始に、物として我詩に入らぬはなきやうになりぬ。我世は夢の世、空想の世となりぬ。寺にありて、僧の歌ふとき、提香爐を打ち振りても、街にありて、叫ぶ賈人、轟く車の間に立ちても、聖母の像と靈水盛りたる瓶の下なる、小き臥所の中にありても、たゞ詩をおもふより外あらざりき。冬の夕暮、鍛冶の火高く燃えて、道ゆく百姓の立ち倚りて手を溫むるとき、我は家の窓に坐して、これを見つゝ、時の過ぐるを知らず。かの鍛冶の火の中には、我空想の世の如き殊なる世ありとぞ覺えし。北山おろし劇しうして、白雪街を籠め、廣こうぢの石の「トリイトン」に氷の鬚おふるときは、我喜限なかりき。憾むらくは、かゝる時の長からぬことよ。かゝる日には、年ゆたかなる兆として、羊の裘きたる農夫ども、手を拍ちて「トリイトン」のめぐりを踊りまはりき。噴き出づる水に雨は、晴れなむとする空にかゝれる虹の影映りて。

花祭

六月の事なりき。年ごとにジェンツァノにて執行せらるゝ、名高き花祭の期は近づきぬ。(ジェンツァノはアルバノ山間の小都會なり。羅馬と沼澤との間なる街道に近し。)母上とも、マリウチアとも仲好き女房ありて、かしこなる料理屋の妻となりたり。(伊太利の小料理屋にて「オステリア、エエ、クチイナ」と招牌懸けたる類なるべし。)母上とマリウチアとが此祭にゆかむと約したるは、數年前よりの事なれども、いつも思ひ掛けぬ事に妨げられて、えも果さゞりき。今年は必ず約を履まむとなり。道遠ければ、祭の前日にいで立たむとす。かしまだちの前の夕には、喜ばしさの餘に、我眠の穩ならざりしも、理なるべし。

「エッツリノ」といふ車の門前に來しときは、日未だ昇らざりき。我等は直に車に上りぬ。是れより先には、われ未だ山に入りしことあらざりき。祭の事を思ひての喜に胸さわぎのみぞせられたる。身の邊なる自然と生活とを、人となりての後、當時の情もて觀ましかば、我が作る詩こそ類なき妙品ならめ。街道の靜けさ、鐵物いかめしき閭門、見わたす限遙なるカムパニアの野邊に、物寂しき墳墓のところ〴〵に立てる、遠山の裾を罩めたる濃き朝霧など、我がためにはことぶび觀るべき、めでたき祕事の前兆の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com